農林業からみた内陸地域

佐々木　隆
(信州大学農学部)

1．はじめに

内陸とは、元来ジオグラフィックな概念であり、「海岸から遠く離れた陸の内部」というのが一般的な見方であろうが、それに対し、（1）様々な分野から接近することで新たな視点が探れないか、そしてその際（2）とりあえずは日本の内陸、とりわけ私たちが主たるフィールドとしている信州を念頭におきながらこれに接近する、ということが当研究会の当面の課題であった。このような理解に立ち、小論では農林業という場から、内陸の特徴やそれが果たしてきた役割などを考えてみることにする。

内陸地域を対象に取り上げた成果はいくつかあるが、ここではこの地域をもっとも包括的にとらえようとした試みとして、市川健夫・山本正三・斉藤功編『日本のブナ帯文化』(1) をとりあげ紹介することから始めたい。これは、中尾佐助が提唱した照葉樹林文化の方法を踏まえ、それをより日本に適合する形で展開させようとしたものである。そして照葉樹林帯（常緑広葉樹林）は西南日本の暖温帯に限定すべきであり、それ以外の寒冷地は落葉広葉樹林帯として把握した方がより適合的であるとする。その際、落葉広葉樹林をブナで代表させブナが生育可能な地域（したがって実際にはブナが生育していない地域も含む）にブナ帯という名称を与えたのである。そしてまた、ブナ帯（落葉広葉樹林帯）には森林を基盤とする文化様式が共通にみられるとし、それをブナ帯文化と呼んだ。

しかし、後にみるように、ブナ帯とは実は内陸の主要地域をカバーするものでもある。西南日本においても、高地はブナ帯に含まれているし、東北日本においても沿岸部は該当せず、山間地がそれに相当するからである。このようなことからすると、第１次的接近として、ブナ帯を内陸地域に、そしてそこでの特色とされたブナ帯文化を内陸地域の特色と読み替えることができるであろう。そこで、以下ではまずこのブナ帯文化論を紹介しながら「内陸」地域の特性を考えてみたい。

もっとも、このように日本全体にまたがる内陸地域を共通性のみでとらえることが妥当なのかどうか、共通性があるとしても多様性の方が大きいのではないか、という議論は当然ある。日本をとり上げても「海岸から離れている」地域は沖縄から北海道まで、どこにでも存在するし、沖縄と北海道では社会的、民俗的特質が大きく異なる。また島嶼部においても存在しうることを考えるとその差異性はさらに大きいと予想されるからである。しかしそうであるとはいえ、現段階ではまだ内陸概念が明確になっているわけではない。このような状況において、それに接近するための１つの方法として、とりあえず地域の差異性を捨象し共通性のみに注目してみることも有効であるように思われる。

2．包括的にとらえた「内陸」

さて、前述したように、市川等は暖温帯の照葉樹林（常緑広葉樹林）文化に対し、寒冷地帯には西南日本の暖帯文化と趣を異にした文化様式が形成されているとし、これをブナ帯文化と呼んだ。そこで展開された内容を簡単に紹介すると以下のようになる。

(1)ブナ林の分布（落葉広葉樹林が生育可能地帯）

九州地方から北海道にかけて分布している。含まれる地域を列挙すると、①九州山地は阿蘇を中心とした標高 1,000m 以上の地域。南限は大隅半島の高隅山である。②中国地方では、中国山地の蒜山や大山、③四国地方は、四国山地の剣山、石槌山、④近畿地方では、紀伊山地の大峰山や鈴鹿山脈、丹波高原、比良山、⑤中部地方は、中央高地の飛騨山地や八ヶ岳の 800～1600m 地帯と白山山麓、⑥関東地方では、箱根、秩父山地、関東山地、三国山脈、日光山地、⑦東北地方では、奥羽山脈、出羽山地、北上山地、阿武隈山地、⑧そして北海道では渡島半島が該当し、ここが北限とされている。

(2)ブナ帯の気候風土

ブナ帯は日本のみではなく北西ヨーロッパにもみられるとし、気候風土については両者の比較も合わせてその特徴が述べられる。その主な点を上げると以下のようになる。

① 日本のブナ帯は、北西ヨーロッパのブナ帯に比べ栽培可能な作物が多いが地力は低い。

② 降水量は年 1,000m 以上でヨーロッパに比べ多い。林床にチシマザサ、クマザサなどが繁茂し、牛馬の林間放牧に適する。ヨーロッパのブナ帯はナラ、ブナなど堅果による豚の放牧がなされた。これに対し、日本の堅果類はクマ、イノシシ、サルなどのエサとなったし、落葉果樹の若芽、野草はカモシカ、シカ、ウサギのエサとなった。

③ 果樹（リンゴなど）の主要生産地である。カキ、ブドウ、モモ、ナシは常緑広葉樹林帯との中間地帯に分布している。

④ ワラビ、カタクリなどの根茎類やマイタケ、ヒラタケ、ナメコなどキノコ類、さらにはノイチゴなどのベリー類が豊富にある。

⑤ 森林が供給する多様な昆虫類は、イワナやヤマメなどエサとなり、多彩な渓流魚を育成している。

(3)ブナ帯の農耕文化

⑥ 畑主体の農業が行われていた。そこでは、伝統的にアワ、ヒエ、キビ、ソバなどの雑穀農業が中心とされてきた。また、カブやダイコンなど根菜類の生産も行われてきたが、これらは主食を補う補食用作物として位置づけられてきた。

⑦ 馬を主体とする畜産が展開されてきた。馬は運搬用にも使われたが、最も重要視されたのは馬飼養による厩肥の生産であった。厩肥の有無が畑作生産に大きな影響をもったからである。

⑧ 木材資源の活用もなされた。地域民具の制作などには落葉広葉樹も使われたことから、木地師も存在した。

⑨ 民間薬や染料などの原料供給地であった。キハダは百草丸や染料の原料として使われたし、行者ニンニクやトリカブトもこの地域に生育した。

以上のような点が、落葉広葉樹林帯において伝統的に見られてきた点とされる。また、近代以降では、それに加えて高原野菜、酪農などの高冷地農業が行われるようになる。また避暑地やスキー場などリゾート地としての展開もみせるようになるとされる。そして以上のような特徴を経時的にとらえ直すと、次のように整理できるとしている。すなわち、

⑩ ブナ帯における発展段階は、(a)自然物の採取段階、(b)雑穀を中心とした畑耕作と家畜の

段階、(c)水田ヒエ作、畑の２年３作（ヒエー麦・バレイショーダイズ）段階、(d)稲作、養蚕、製炭を中心とした段階、そして(e)高原野菜、酪農、リゾート（スキー、避暑地）などを主とした段階、の５つである。

以上のような見方を整理してみると、内陸＝落葉広葉樹林帯＝高標高地帯＝高（寒）冷地帯という内陸像が浮かんでくる。そして内陸＝高冷地という規定は、私たちが通常描く内陸イメージとかなりの程度重なる。そこで、この地帯の特徴として上げられた諸点のうち、①畑作を基盤とした農耕文化が形成され、高冷地農業としてそれを展開させてきた、②冷涼な気候を活かしリゾート地としての形成をすすめた、という点に着目しそれを検討の出発点としたい。

３．畑作農業と「内陸」

内陸では稲作よりも畑作が農業の中心となってきた。そして畑作分野では、販売や加工が大きなウエイトをしめてきた。この事情は、内陸地域が養蚕に代表されるように、商品作物を通じて地域外との交流を早い時期から行っていたことを意味する。交流ルートには市場を通してのものと、協同組合運動を通してのものがあったが、内陸地域は、国内、国外から様々な刺激を受ける中で展開してきた地域としてとらえることができる。その意味では内陸とは生態的な地域ではなく、きわめて動態的な地域として位置づけられるように思う。

ちなみに、協同組合運動のルートとは製糸業の営業形態の１つである組合製糸の展開を通してであった。組合製糸とは営業製糸に対し協同組合形式で運営される製糸業のことを指すが、生産者が繭を作るのみでなく生糸に加工し販売するまでを一貫して行う、というものである。そして買い取り方式ではなく生産者からの委託販売を行う点に特徴をもつが、それが独自の協同組合形態であるとして国際的に注目された経過がある。

この組合製糸は長野県において大きく展開した。その代表的な存在は上伊那郡で設立された龍水社である。上伊那郡では、明治３１年に協同組合的な運営を行う上伊那合資会社が設立された。これは当時の生糸高、繭安に対応しようとして作られたものであるが、明治３３年に産業組合法が施行されたことに伴い、３８年に上伊那生糸販売組合となり、さらに大正３年に龍水社として上伊那郡を結集した組合製糸組織となった。龍水社はその後、山田織太郎を中心に発展し組合製糸のシンボル的存在となる。

なお、組合製糸の先駆けは群馬県の碓氷製糸社（明治１１年設立）であるといわれるが、その影響は長野県へもただちに及ぶ。龍水社の設立者の一人であった山田織太郎はそれ以前に飯島村で組合製糸の設立を図った時、まず碓氷社へ参加を申し入れた。これは実現しなかったが、同じ群馬県にあった下仁田社の傘下にしばらく入っている。このように内陸地域間の交流は密接であった。とはいえ碓氷社などの事業の中心は買い取り方式に基づく共同販売にあったのに対し、龍水社は委託製糸であり生産と加工を一体化させようというものであった。このような龍水社が知られるようになったのは日本でより外国の方が早かった(2)。国際協同組合連盟に提出されたパンフレット『龍水社』がヨーロッパに広まっていたからである。それまでの協同組合はイギリスのロッジデール公正開拓者組合を源流とする消費協同組合かドイツのライファイゼンにより構想された信用協同組合で主であったが、「委託販売」、「加工販売」という形の協同組合はなかった。それゆえ龍水社は、第３の協同組合として注目を集めたのである。内陸地域は、このように早い時期から市場を通して、あるいは事業組織を通して国内外との関わりをもってきた。

ともすれば閉ざされた地域、あるいは自給的農業というイメージが強い内陸であるが、実際は外へ開かれた地域であり、早い時期から国内外の市場と向き合う形で農業を展開させてきた地域であった。これは米を中心とした沿岸部や大河川下流域の農業とは大きく異なる点である。

４．高冷地農業と「内陸」

さて、以上述べた畑作に加え、前に高冷地農業の展開とリゾート地の形成も、内陸をその他地域から分ける第一次的目安になるのではないか、とした。そこで次にこの点を取り上げてみたい。

さて、前にみたように高冷地としての内陸といっても、そこには九州から北海道にまたがる広い地域が含まれる。また、最近でこそ高冷地農業やリゾート地の形成は各地でみられるようになってきたが、それでもすべての地域でそうであるわけではない。加えてそれらは日本各地で一斉に展開したわけでもない。結論を先取りしていえば、それは長野県が生みだし主導してきた農業形態であった。それゆえに信州型内陸地域の特徴ともいえるものである。そこで以下ではまず、高冷地農業の展開プロセスとそれを主導してきた要因を検討の手がかりにし、信州型内陸農業の特徴を探っていくことにしたい。

(1) 高冷地農業の始まり　――起点としての軽井沢――

高冷地農業とは通常次の２つの点からとらえられている。１つは、標高が９００ｍあるいは１，０００ｍ以上で無霜期間が１００～１３０日の地域で行われる農業、いい換えれば平場の産地では困難な、夏期に収穫できるキャベツやレタス、ハクサイなど生鮮葉菜の生産が可能な地域という自然的立地規定である。もう１つは、東京、大阪、名古屋など大消費地に近いという経済立地面からの規定である。高速交通網が整備されるまでは、生産条件はあったとしても輸送時間が制約要因となり、長野県の軽井沢周辺、南牧村、川上村、原村、富士見町そして塩尻市の洗馬や朝日村あるいは木曽の一部、そして群馬県の嬬恋村以外では生産を拡大させることができなかったのである。岩手県など類似の生産条件をもった地域がそれに取り組み始めるのは１９８０年代に入ってからであった。

なぜこのことを取り上げるかというと、このように極めて地域限定性をもった高冷地農業であるが、それを主導したのは長野県であり、その中でも軽井沢周辺であったという事実に注目したかったからである。キャベツなど葉菜の夏期栽培は、１９００年頃軽井沢で始まり、以後周辺地域へ順次拡大するという経過をたどった。ではなぜ軽井沢から夏期の葉菜生産が始まったのか。それは、内陸のもう１つの特徴とされたリゾート地としての展開と関わる。そして両者が密接に絡みながら展開したところに長野県という１つの内陸地域がもつ特有の性格が示されている。

結論的にいえば、軽井沢がリゾート地それも外国人の避暑地として開発されたという事情から、冷涼な気候風土をもった長野県という内陸地域が異文化交流の場になりえたことにある。つまり、キャベツなどの葉菜は日本人にはなじみがない野菜であったが、避暑地であってもそこに滞在する欧米人は当然西洋料理を好む。そのためにはそれなりの食材生産が求められ、それに応える形で地元農家が葉菜生産に取り組み始めたことが直接のきっかけとなったのである。また、避暑が目的であることから当然のことながら外国人が滞在する期間は夏期に限定された。それゆえ、外国人向けの葉菜生産も夏期に行われなければ意味がなく、このことが夏期の野菜

生産を開始させる要因となったのである。「軽井沢の人達は生活するのに必死でしたから、外国人が描いた図面をもとにして家具や調度品を作る。ほかの人がクリーニングを覚える。西洋野菜の栽培を農家は教えてもらって、その料理法を外国人婦人からコックが教わる。夏以外は、軽井沢にいても意味がないので、横浜の外人街に住み込んだり、外国航路の船に乗り込んで、そういう技術を身につけていったのです。今でいう輸入文化の吸収でしょう」(3) という状況があったのである。

ちなみに、軽井沢が避暑地となった経過については次のようにいわれている。「明治１９年４月、ショー、デクソンの２氏は相前後して（内地旅行の途中）この地を過ぎ、山容野色のいかにも泰西的なるを見て、親しく土地の状況を観察して帰京し、再び同年７月上旬に、２氏いずれも家族をともなって来たり、８月下旬まで滞在した。・・・ここにおいて、ショー氏はこの滞在によって実現したる軽井沢の風土が避暑地として好適なるを証明し、もっぱら内地在留の欧米人に紹介し来遊を勧め、遂に２１年５月、自ら率先して避暑用の別荘を同地内大塚山の頂に建てた。これがそもそも軽井沢における避暑別荘の嚆矢である」(4)。なお、ここで登場するショーとはカナダ生まれの宣教師アレキサンダー・クロフト・ショーであり、デクソンとはイギリス生まれで文化大学教授のジェームズ・メイン・ディクソンのことである。そしてショーが宣教師であったことが後に大きな影響を与えることとなる。そしてこれ以後、外国人向けのホテルや別荘、そしてまた日本人の滞在者や別荘も増え、避暑地として形作られていったのである。

ただし、高温多湿の東京を避ける、というだけなら東京周辺には箱根や日光などがある。なぜ軽井沢だったのか、ということについては次の事情が指摘されている。１つは、「都会の日常性を断ち切り、高原に遊ぶ。そのためにはほどよい距離」つまり遠すぎもせず、近すぎもせず、「ひとやま超えた別天地」(5) でしかも山と広々とした空間がある、という地理的な条件であった。２つめは、「娯楽を人に求めずして自然に求めよ」というリゾート哲学である。地域を上げて「芸娼妓を許さずまたこの種の婦人を入れずして、あくまでも善良なる風習を保つに腐心」する、という地域づくりの考え方が早い時期に確立していたことである。避暑に訪れる外国人の大半が宣教師とその家族であったことが、このような哲学を生んだといわれている(6)。３つ目は、外国人宣教師達が超教派で開いたアジア地区会議の場としてこの地が選ばれていたことである。参加者は日本に在住する人達以外に中国大陸に派遣されていた人達も含まれていたようである(7)。４つ目としては、まだ外国人が少なかった当時、軽井沢以外に外国人同士が日常的なつきあいをできる場がなかったことも上げられるであろう。「日本だけでなくアジア全域から外国人家族が集合したのです。他国にはこんなユニークな避暑地がないと思いますよ」(8) という状況にあったのである。

いずれにしろ、以上述べてきたように、内陸であるゆえの気候・風土と東京から適当な距離にあるという特徴が、軽井沢を異文化交流の場とさせ、高冷地農業を生み出す要因となっていったのである。

(2) 高冷地農業の拡大 ——開拓——

軽井沢を起点として出発した高冷地農業は、日本人の食生活が洋風化しキャベツなど葉菜類への需要が増えるに従い、その後周辺地域へ順位拡大していく。しかし、１９４０年代に入ると戦争の影響が出始め生産は縮小に向かう。一度縮小した野菜生産が復活するのは戦後に入ってからである。そのきっかけとなったのは駐留軍特需であった。これにより、キャベツ生産は

拡大し、またレタスの導入もなされるようになった。そしてここでも復活の起点となったのは軽井沢であり、１９４７年にそれらの出荷が再開されている。また、それに引き続き、１９５０年代に入ると朝鮮戦争によりレタス需要が増加し、これも生産拡大を促す大きな要因となった。そして、それにともない菅平、嬬恋、川上においても、ダイコン、ハクサイ、キャベツの生産が再開されている。

なお戦後の生産拡大に当たって見逃せないのは開拓である。ここではその代表的な事例として南牧村野辺山地区を取り上げてみたい。野辺山原はもともと広大な樹林地であったが、１９４０年代に軍が東部８部隊（砲兵隊）の演習地とする目的で、続いて文部省が予科練生を対象としたグライダー演習基地を設けるために、次々と樹木伐採と整地を実施した。そしてこの用地が後に高冷地農業を展開させる基盤となった。

この地域の開拓は、１９４５年１１月に定められた「緊急開拓実施要項」により本格化する。開拓には１７０世帯が参加した。これには、「長野県開拓増産佐久支隊」、クリスチャン農場、農園組合、第五組合など多様な団体、多様な経歴をもつ人達が含まれていた。開拓者達は残存兵舎で居住し、旧軍のトラクターを使い開墾を始めたという。そして１９４８年に野辺山開拓農業協同組合を設立し、そこに諸開拓団体を統合することで開拓組織の統合をはかっている。

なお農業生産についていえば、当初は自給のためにバレイショと雑穀の生産を主としていたが、１９４９年に実施された蔬菜統制令の廃止をうけ、ダイコンやキャベツの生産を開始している。そして以後、葉菜類の生産を中心とした高冷地農業がここで大規模に展開することになる。

ところでこのようにして出発した野辺山農業の特徴を上げると、第１には、１戸当たり平均６ha 前後の農地を所有している点がある。これは日本の農業においては飛び抜けた大きさである。この農地規模の大きさは、野辺山に開拓可能な広大な土地が存在していたこと、つまり日本のフロンティアーであったことと関わる。先に述べた、グライダーの演習基地であった文部省用地やかっては軍の演習地であり当時農林省へ移管されていた国有地、あるいは南牧村の村有地などが耕作可能地として存在していたからである。これらの土地の払い下げを受け、それを農地に転換することで、高冷地農業の展開基盤を作り上げることができたのである。

以上の事情、つまり広大な未開拓地の存在が高冷地農業の展開を可能とさせたという事情は、野辺山地区と並び高原野菜の産地となった川上村や菅平でも妥当する。川上村では、既存耕地周辺の集落共有地を開墾することで、農地造成を行っている。１９６０年代に戦場ヶ原（梓山上流部）の開拓を土地改良法による開拓パイロット農用地造成事業を導入して行ったほか、秋山地区や西部八ヶ岳裾野の開拓も同様になされている(9)。また、菅平では、戦後、緊急開拓事業により国有地、公有地、民有地を農地開発し、農地の拡大をなしとげている。

第２の特徴は、個々人の主体性を重んじる農村風土の形成にみられる。開拓者の人達は様々なバックグラウンドをもち、各地から集まった引揚者の人達から構成されていたが、都市生活者であった人達も少なくなく当時にあっては学歴が高い人達も多かった。このようなことが伝統的な日本の農村とは異なる風土を作り上げる基盤となったとみられる。払い下げを受けた土地を分配する際、比較的条件のよい農地をえた農家には少なく、条件のよくない土地をえた農家には相対的に広い面積を配分するなどの配慮がなされたことは、その１つの表れであるとみなされている(10)。

このようなことからすると、広大な未開拓地の存在つまり開拓という事情を背景にして、多様なバックグラウンドをもつ人達が交流する場となったことも内陸の１つの特徴といえよう。

５．高冷地農業の２つの軸　――むすびにかえて――

以上のように農業という点からみると信州型内陸地域は、高冷地農業、広大な未開拓地の存在、リゾート地としての開発、大都市から適度な距離での立地、それに「娯楽を自然に求めよ」という当時の日本にあっては恐らく他に類例がないのではないかと思われる禁欲的なリゾート哲学を確立しえた地域風土などの要因が互いに絡まりながら展開した地域とみることができる。つまり、立地条件と欧米の景観を思わせる山と広大な未開拓地の存在は外国人向けのリゾート地としての発展につながったし、外国人が滞在する夏期に葉菜類の栽培が可能であったこともこれを支える要因となった。そして逆に、高冷地農業を発展させる上で、このようなリゾート地としての条件は大きな意味をもった。欧米文化との交流、開拓地に集まった人達がもっていた文化との交流など、国内外の諸文化（それは地域住民にとってはいずれも異文化であった）とのぶつかりあい、そして市場への輸送が高速交通網やコールドチェーンの整備以前から可能な立地条件をもっていたことにより、高冷地農業ははじめて展開しえたからである。

言い換えると、高冷地農業はリゾートと市場という２つの要因を軸に展開してきたといえる。当初はリゾートとの関わりの中で生産がなされ、市場の拡大にともない軸を大都市市場とのつながりへ移す、というパターンをとってきた。このように高冷地農業は、リゾートと市場という外部と接触する相異なる２つの窓口を保持してきたことで、外部からの刺激や動きを受け止め、生産を展開させてきたのである。

では、現在の状況はどうか、というと高冷地農業は再びリゾートとの関わりを強め、軸をそちらに移しつつあるように思われる。共同販売を進めることで軸を完全に市場へ移したかにみえたが、その行き詰まりの中でグリーンツーリズムや体験型農業あるいは農業公園などリゾート的要素が高冷地農業へ再び導入されつつあるからである。

しかし、とはいえ市場とリゾートという窓口は他の地域でも持ち始めたことにより、信州型内陸農業の独自性は相対的に薄れてきている。その意味からすれば、内陸研究はさらなる独自性を探る上で大きな意味をもつと思われる。

【注】

(1) 市川健夫・山本正三・斉藤功編『日本のブナ帯文化』（朝倉書店、1984 年）
(2) 中村信夫『刻まれた歴史』（家の光協会、昭和６１年）、p.142～162
(3) 宮原安春『軽井沢物語』（講談社、1994 年）、p78
(4) 同上、p.29～30
(5) 同上、p.136
(6) 同上、p.199～202
(7) 同上、p.136～137
(8) 同上、p.154
(9) 川上村の林野管理の詳細については『長野県川上村林野保護組合調査（中間報告）』（信州大学人文学部社会学研究室、平成１０年）を参照。
(10) 加藤武夫『高冷地農業――生産環境と流通――』（大明堂、１９９１年）、p.83～85